チラシ裏

◇ 日 程 ◇

13：00 開会式

挨拶　志村 美和（NPO 法人春日井子どもサポート KIDS COLOR 理事長）

石黒 直樹（春日井市長）

13：15 成果報告と検討　〈司会〉堀部 要子（名古屋女子大学准教授）

1．「障害者の生涯学習実践研究講座」

2．「文化講座」 ①春日井インクルーシブアートキャラバン

②私だけの書 TIME

3．「スポーツ講座」春日井ドリームサッカーフェスティバル

14：20 ＜ 休憩 ＞

14：30 ラウンドテーブル「地域共生社会と障害者生涯学習支援を考える」

〈コーディネーター〉田中 良三（愛知県立大学名誉教授）

鈴木 規子（文部科学省 障害者学習支援推進室室長）

伊藤 佐奈美（中部大学 現代教育学部教授）

上田 敦（春日井市 文化スポーツ部長）

辻 浩（名古屋大学大学院 教育発達科学研究科教授）

16：00 閉会

◆申し込み方法◆ QR コードを読み取り、必要事項を入力して送信してください。 締め切り 12 月 8 日（木）

◆ オンライン参加の方には事前にプログラム集をお送りします。対面参加の方は当日会場でお渡しします。

主催：NPO 法人春日井子どもサポート KIDS COLOR/春日井市/春日井市教育委員会/春日井市社会福祉協議会/文部科学省

協力：愛知県立春日台特別支援学校/愛知県立春日井高等特別支援学校/愛知特別支援教育研究会/春日井市肢体不自由児・者父母の会/春日井市手をつなぐ育成会/春日井精神障害者家族会むつみ会/全国障がい者生涯学習支援研究会

＜実行委員会＞ 春日井市・文部科学省委託事業連携協議会

＜事 務 局＞ 春日井市文化・生涯学習課/NPO 法人春日井子どもサポート KIDS COLOR

8．コンファレンスアンケート結果

令和4年12月17日（土）、春日井市にある文化フォーラム春日井視聴覚ホールにおいて、『地域共生社会を目指す障害者の生涯学習プログラム開発・推進コンファレンス in 春日井』を開催した。

開催にあたり、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、会場参加の対面参加方式と Youtube 配信によるオンライン参加方式によるハイブリッド方式とした。

今年度から、参加者の申込受付は、春日井市文化スポーツ部文化・生涯学習課が担当することにした。申込〆切は、対面・オンラインどちらも同日（12月8日）に設定して、オンライン参加者には、事前に当日の資料であるコンファレンスプログラム集を郵送した。これは手元に資料があることによって当日の発表者の話と資料で内容についてより理解していただくことを目的としている。なお、昨年度開催したコンファレンスに対して、「ハイブリッドで開催いただき感謝申し上げます。資料も送付頂いたおかげで、手元で確認しながら受講することができました」との意見があったことから、紙媒体で資料を郵送することの意義は十分にあると考えられる。

広報については、文部科学省、春日井市、NPO 法人春日井子どもサポート KIDSCOLOR の HP や、関連団体の SNS（Facebook）やメーリングリストでの案内、チラシを配布して周知した。

1. 参加者

オンライン参加15名、対面参加62名（登壇者やコンファレンス実行委員を含む）、計77名であった。今年度は、参加受付時点で所属を尋ねていなかったため、一般参加者の所属を把握することはできないが、春日井市内に在住している方や春日井市で活動している方（職員等）が大半を占めていることは参加者名簿から読み取れた。また、オンライン参加も取り入れたため、県外の参加者も一定数いたことは、春日井市の取り組みから参加者が行っている活動の示唆を得たいという現れでもあると考えられる。

参加者には、コンファレンスのアンケートへの協力をお願いした。オンライン参加の人にも、対面参加の人にも、QR コードを読み取って Web 上（Google Forms）で回答できるようにした。回答期間はコンファレンス開催日である 2022 年 12 月 17 日から 12 月 25 日までとした。なお、設問1～4（選択式、単一回答）は、昨年度と全く同じ項目であり、昨年度との比較が可能となるよう配慮した。

結果、オンライン参加 15 名、対面参加 62 名のうち、オンライン参加者の回答は3件（回収率 20.0%、昨年度は 69 名中 15 件で回収率 21.7%）、対面参加者は 13 件（回収率 20.9%、昨年度は対面参加 95 名中 21 名で回収率 22.1%）であった。回収率については、昨年度よりも微減である。回収率を高めるために、例えば、コンファレンス終了直前に、アンケートへの協力をお願いした（フォームの URL をつけた）メールを参加者に送信し、終了後すぐに回答できる環境を提供することも回収率を高める1つの方法と考える。以下、アンケート結果の集計を掲載する。

【１】所属（選択式、単一回答）※合計人数にある（）は昨年度の回答者数である。

	オンライン参加	対面参加	合計人数
①学校（教職員等の関係者）	0	1	1（9）
②学校（生徒）	0	0	0（0）
③大学（教職員等の関係者）	0	0	0（4）
④大学（学生・大学院生）	0	0	0（1）
⑤行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術）	0	1	1（7）
⑥行政（学校教育　※関係機関含む）	0	0	0（1）
⑦行政（保健・福祉・労働　※関係機関含む）	0	1	1（1）
⑧行政（その他の部局）	0	1	1（1）
⑨社会教育関係団体（※スポーツ・文化芸術団体を含む）	0	1	1（1）
⑩社会福祉協議会	2	1	3（0）
⑪教育委員会	0	0	0（1）
⑫障害福祉サービス等事業所	0	2	2（1）
⑬当事者等団体（例．親の会や NPO 団体・一般社団法人）	1	3	4（2）
⑭保護者（所属なし）	0	1	1（3）
⑮社会教育施設（例．公民館）	0	1	1（0）
その他	0	0	0（4）
合計	3	13	16（36）

【２】あなたは、どのような立場で障害者の生涯学習活動に関わっていますか？（選択式、単一回答）
※合計人数にある（）は昨年度の回答者数である。

	オンライン参加	対面参加	合計人数
①仕事として	0	5	5（19）
②ボランティアとして	3	1	4（8）
③参加者として	0	3	3（2）
④これまで関わったことがない	0	4	4（7）
合計	3	13	16（36）

【３】本コンファレンスは全体を通じて、今後障害者の生涯学習活動に取り組むにあたり、参考になる内容でしたか？（選択式、単一回答）※合計人数にある（）は昨年度の回答者数である。

	オンライン参加	対面参加	合計人数
①大変参考になった	2	8	9（18）
②参考になった	1	5	6（18）
③あまり参考にならなかった	0	0	0（0）
④参考にならなかった	0	0	0（0）
合計	3	13	16（36）

【４】本日のプログラム（成果報告及びラウンドテーブル）について、ご感想・ご意見をお聞かせください。（自由記述）

- 事例の説明が詳細で、わかり易かった。
- ラウンドテーブルでの各担当の持ち時間が少し少ないように感じました。
- 社会教育主事、社会教育士の役割について今後の展望を聞かせていただいて、未来が拓けるような気持ちになりました。
- ラウンドテーブルでもう少し質疑応答の時間があるとよかったと思いました。
- 中部大学の教授の発表で、生涯学習イベントの参加には親の送迎が１００％必須である現状が報告された事。そもそも移動や参加意思決定に支援がないと参加できない事はいくら機会を与えても参加できないことを意味しており、大きな問題が見えたと思う。
- それぞれの活動報告大変よかったです。サッカーフェスティバルについては、フェルボールのスクールでサッカーを続けられる取り組みもしてくださるとのことでしたが、欲をいうと可能であれば自宅の近くのチームに入れるようになるといいなと思いました。また、アートキャラバンでは費用の話がでましたが、私たちも習いごとをするときは月謝(材料費)を払います。障がいがある人対象であっても、費用はご負担いただいてよいと思いました。
- 卒業後の状況や障害本人の意識、ニーズをしることができた。卒業後からではなく、幼い頃から興味があることに気づきお互い楽しんで学びたいと思いました。
- 成果報告は写真や動画を交えて大変わかりやすかったです。また、実際に参加している方の声も聞けてよかったです。ラウンドテーブルは各方面の方の話が聞けて勉強になりました。
- 大変勉強になりました。
- 生涯学習講座で学んだことも多く、その総括のような催しで、勉強になりました。
- 障害者の生涯学習実践研究講座を受講していましたが、今年度の成果報告を聞くことができて、よかったです。また文化講座やスポーツ講座に実際に参加した人たちの話が聞くこともできてよかったです。
- サッカーが現実的に進んでるとお聞きして、有り難いなと思いました。少しずつでも進んでいき、みんなが過ごしやすい世の中になっていけばいいなと思いました

- ラウンドテーブルに行政の方も参加していただけたことは良かったと思います。
- 障がい者の生涯学習プログラムも2年目に入り、ますます、民間、行政、スポーツ団体と連携し、参加しやすいプログラムと指導者の育成をしていくことが課題である。
- いつもありがとうございます。
- ①第２回障害者の生涯学習実践研究講座　全６回について…（１）春日井市における障碍者の学びに関する障害福祉の実践の中で、春日井市は決して障害福祉の進んだ地域でないが、この委託事業を受けたこと自体に、今後障害福祉に取り組む積極的な姿勢がうかがえる。ここを評価したい。（２）この春日井市においても、民間では、障がい者の保護者が立ち上げたり、スポーツに関わりながら今回の事業の以前から障害者対象の取り組みをされていたところを知ることができた。この中では、「学びは楽しい」「障害者のニーズを大事に」「障害の有無に関係なく楽しめる」。（３）地域の「生涯学習」の役割を認識し、権利条約や障害者差別解消法・障がい者の基礎的理解を得た上で、行政が支援者の養成をし、公民館などで、障がい者を含む様々な企画できれば、「障害のある人の社会参加が地域を明るくする」春日井市となるであろう。②文化講座・スポーツ講座…（１）アートキャラバンも書タイムもサッカーも、企画内容は素晴らしい。参加者もサポート者も満足。課題は、参加者が少ないこと。しかし、年齢制限を取り払い、参加してもらえば、慣れて口コミで誘うこともできたとのこと。作品などを展示や広報・継続することによって広がる可能性を感じた。移動手段もコミュニティーバスのようなものが１台あれば、その会場の最寄りの駅まで送り迎えもできるのではないかと感じた。③ラウンドテーブル　テーマ「地域共生社会と障害者生涯学習支援を考える」…（１）国の障害者生涯学習支援政策について、春日井市の障害者福祉と生涯学習の取り組みについての経過がよく理解できた。（２）中部大学においては地域と大学の連携をしながら、今回の障害者の生涯学習の取り組みに協力したことを知った。特に印象的だったのは、一障害者の保護者からの訴えが大臣の心を動かし、その後の全国調査から国としての対応「障がい者の生涯学習」を推進する方向に至った点である。当事者・現場の実情をしっかり把握することの重要性・効果を感じた。また、ボランティアの学生の前向きさには感心。しかし、「障がいのある方を知らなかったから・・・不安」が表すことの課題を感じた。春日井市においては、「障害者権利条約の理念の尊重」の下「地域共生社会の実現」に向け、「第５次春日井市障がい者総合福祉計画」を策定推進中だが、この中の教育については、「障がいのある子どもが障がいのない子と共に」と「教育現場での障がい理解の促進を図っています」が、現場を知っている者（自分）にとっては現実とかなりかけ離れていると思わざるを得ない。生涯学習においても、学校教育を含むとすれば、特別支援学級を設けて分けることはどうなのか？せめて交流の時間をもっともっと確保すべきかと思った。辻先生のお話では、「地域共生社会づくりと『この子らを世の光に』」は、感動的であった。効率性・業績（成績優秀・立派）の価値を追求するばかりでなく、多様性に応じて精一杯生きることの価値を認め合える世の中になってほしいと切に願う。すべての教師は障害のある子らと過ごす経験をすれば、その子らに学ぶことによって、もっと謙虚に子どもたちと接することができると思う。

【5】その他、プログラム全体を通じてお気づきになったことがあれば、お聞かせください。（自由記述）

- 特にありません。
- 成果報告では、単年度で終わらず、いかに来年度に繋げれるかの言及が欲しかったです。
- ダンスの講義がとても楽しく、また講師の方の理解の深さ、応用力に感銘を受けました。多忙で参加できないプログラムも多くありましたが、昨年よりいっそう地域の連携か深まったように感じます。
- 各方面の活動報告を聞いて色々な可能性があると思いました。特にスポーツ講座は大変参考になりました。
- 良かったです。
- 愛知県外からの参加もあり、春日井市が先駆けになっているのだと、改めて感じました。
- 参加者への周知の難しさ。
- 障がい者の、参加しやすい、プログラムの作成を手探りでさがしている。
- コロナの影響もあってか、子どもたち同士の真の触れ合いが減っていることもあり、小学生ではすぐ手や足が出る子が増えているというデーターがある。また、コロナ前から増えている不登校がさらに増えているようだ。今回、障がい者の生涯学習から学んだ、「好きなこと」を「自分のペースで、ゆっくり」「学びは楽しい」が、本来の学習のあるべき姿だと。これが通常学級でも追及されるべきで、我慢すれば必ずかなう。幸せが来る。なんてみんな信じてないのに、苦行である勉強をさせられている。発達障害の子が過剰適応に苦しんだり、一見おとなしい子の中にもイライラが募っていたり。登校支援室を治外法権のように子どもたち本位で過ごさせることができるなら、他の子たちをもその子たち本位で多様性に合わせて過ごせる時間を保障すべきである。障害のある子を差別的にみる姿勢は大人（教師・親）から学んでしまう。子どもたちをより小さい頃から分けずに触れ合うことが多ければ、良いところも至らないところも理解が進むのは明らかである。大人になってから、やれかっこつけて「共生」といってもなかなか進まない。小さい頃から、交流を多くし大人の教師が差別を生まない合理的配慮し、子どもたちに身をもって教えることが必要。心の差別感をなくすには、より小さい頃から混じって触れ合うことからしかない。

【6】企画運営・会場設営（スタッフ・資料等を含む）について、ご感想・ご意見をお聞かせください。（自由記述）

- 段取り、案配申し分無いです。プレゼン機器の設定は、接続機種が替わると起こるので、気にしなくていいです。同じパソコンで、やれば防げますけど。
- よかったです。
- 特別支援教育コーディネーター、通級担当教員の方、特別支援教育支援員の方、医療的ケア児コーディネーターの方、民生委員さん・児童委員さん等、関係ある職務の方々にも参加しやすい計画だといいなあ、と思いました。また不登校になっている子どもたちにも障害等で学びに困難があり悩まれている保護者や当事者の方もいるかと思います。参加していただけるようにご案内

すると、より幅広い対話ができるように思います。

- 準備ご苦労様でした。ありがとうございました。
- 資料もわかりやすく、スタッフの方の対応も丁寧でよかったです。
- 良かったです。
- 資料はとても参考になっています。
- 誰が見ても、わかりやすくまとめられている。
- ご苦労様でした。

【7】今後、本コンファレンスで取り上げて欲しいテーマ・課題をお聞かせください。（自由記述）

- ボランティアとっかかりなので、思いつきません、今後の活動で、思いついたら、意見したいです。
- 来年度予定の取り組みについての言及
- 今回の講座やプログラムを継続して、より深い理解をしたり、市職員の方や地域の方々とのつながり、そこかれ生まれる活動を、市民として育てたい。また、「障害者の生涯学習」と、障害者権利条約、子ども基本法、「一人ひとりの多様なウェルビーイング」、「主体的・対話的深い学び」がどのようにつながるのがよいか、ということについて話し合い、理解を深めたい。
- 障害者の移動手段の支援について。
- 障がい者の方々の社会参加に関する意識
- ダンスがしたいと言っていた子がいるので、ダンスもいいなと思いました。
- 障害者の仲間づくり
- 障がい者の障がいの程度にかかわらず、参加できるプログラムをより深くすすめていく。
- 子どものころからの「共生」

【8】障害者の生涯学習の推進・学びの場づくりなどについて、今後、必要なことは何だと思いますか？（自由記述）

- 自分も含めて、時間を持て余している、ゴロゴロ存在する、動ける高齢者を引き込むこと。
- 各地の行政と教育機関との、より緊密な連携作り。
- 「障害者の生涯学習」の前の段階のインクルーシブ教育についての公立小中学校と保護者、地域の連携。そのためのコミュニティ・スクールなどの仕組みの活用と人や資金の手当て。地域の人々の生涯にわたる「学習」についてのことなのに、「学校」が分離していて輪に入っていないのは、取り組みに壁を感じてしまいます。障害者も健常者も、子どもも高齢者も働く大人も地域を作る一人ひとりで、学校(や公民館、図書館も)も地域のリソースなので、来年度以降、より包括的な対話ができるといいと思います。
- 生涯学習の意味や内容を学校にいる時から知っておくことが大切だと思いました。頑張ります。
- 肢体不自由なら障害者の移動支援とは全く別の、外出支援制度が一般化するほど普及する事。
- 市役所内でも、福祉や生涯学習の担当者だけでなく、関心のある職員でプロジェクトを組んで、庁外の実践者と一緒に春日井市の生涯学習について検討していけるとよいと思います。

- ラウンドテーブルでも話題になりましたが、今後の運営資金、財源をどうしていくかが課題だと思いました。皆さんの素晴らしい取り組みを、委託期間が終わった後もいかに継続していくか、繋いでいくか、知恵を出し合って考えていければと感じました。
- 障害者の生涯学習の必要性をより多くの人が感じ、場を作っていく必要があると思います。場があっても参加者がいない、移動手段がない、付き添う人がいない等、様々な問題が出てくると思うので、細やかな支援が必要だと思います。
- 行政や福祉の連携やそれぞれの努力はもちろん、障がい者の方々自身が積極的に社会参加していくこと、またそう思える社会であること。
- 生涯学習の推進については、毎回交通手段が課題になりますが、交通手段の確保は大きな問題だと思います。また学びの場について福祉事業所などに案内はしていると思いますが、支援者に生涯学習の理解がされていないのも課題だと思います。もっと生涯学習の理解度を上げていかないといけないと感じました。また施設入所者などは、コロナになり何年も外出もできておらず、外部からのボランティアなどとの交流もない状態です。施設入所者にとっての、学びの場づくりの確保は、今後必要に感じています。
- 交通の便。外出支援。通知の仕方（求めている本人に通じる。知らせる方法）
- 障害の軽い方は1人でも参加できるので、はあとふるライナーで行きやすい場所で実施すること。
- 指導者の育成、障がい者の送迎等、参加しやすい体制を整えていく。
- 時計をよめるようにしたいの
- （１）行政の方も多数参加してくださっていたことは、画期的だったが、教育関係の方の参加が少なかったように思う。是非現場の教師や教育委員会の方々に、子どもたちの好きなことへの学びの意欲などの事例を、その反対に本人のやる気の起こらないものをじっと聞いていることのマイナスの気持ちをアンケートなどに学んでほしいものだ。（２）KIDS COLORは、通常学級で、特別支援学級で、困り感のある子どもに寄り添いいろんな事例を体験し、幼いころからの子どもたちの共生のお手伝いをしてきたといっていい。KIDS COLORの発表もさせていただきたい。支援者の診断のつく子どもの成長なども語れるのではないかと思う。また、春日井市の特別支援学級や通級の担当者で心ある方の交流の発表も聞きたい。

（文責　寺谷直輝:事務局員）

9．総括

Ⅰ．委託事業2年目（2022 年度）の特徴

NPO 法人春日井子どもサポート KIDS COLOR は、令和 4 年度文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」に、引き続き、「春日井市における民間団体との連携協働による障害者生涯学習プログラムの開発」と題してその Part.2 に取り組んだ。

委託事業 2 年目は、1 年目（2021 年度）と同じ 4 つの事業を柱に取り組んだが、それぞれ拡充・発展させることができた。

①「障害者の生涯学習実践研究講座」

昨年度と同様、「障害者の生涯学習」についての理解を図るために、講座受講対象を行政職員中心とし、福祉事業所や保護者等と一緒に学ぶことを目的に取り組んだ。昨年度は、障害のある人のライフステージに沿った支援について全国の優れた実践から学んだ。今年度は春日井市内の障害福祉事業実践を生涯学習の視点から取り上げた。講座の 5 回目は、広く市民も対象にした公開講座とした。昨年度から継続して、障害者の幼児期、学齢期、卒業後とライフサイクル毎に生涯にわたる実践を取り上げてきたが、今年度は、保育、教育、福祉など制度も違う多様な取り組みを地域の実情に即して学ぶことができた。また、受講生が小グループワークで、それぞれの立場から自由に意見を出しあい話し合ったことは学びを深める上で極めて有益だった。

②「文化・スポーツ講座」

昨年度は、サッカーなど「スポーツ講座」のみであったが、今年度は新たに、アート（「アートキャラバン」）と書（「私だけの（書）タイム」）に取り組み、「文化・スポーツ講座」に拡充することができた。ここでは、それぞれ、講師、支援員（ボランティア）を配置し、また、活動場所も、大学、公民館、民間サッカーグラウンドに拡がった。

2 年目のサッカー活動は、春日井高等特別支援学校サッカー部との連携ができ、また、来年度から体育の授業に外部講師として参加する予定など、特別支援学校（高等部）と学校卒業後の生涯学習支援との連携・協働に発展させることができた。

③「視察研修」

地域にはない障害者の生涯学習支援の取り組みについて、市外（名古屋市委託青年学級「汽車ポッポ」）と県外（福祉型専攻科：ユーススコラ鹿児島、福祉型専攻科：ジョイアスクールつなぎ）の先進的な取り組みから学んだ。文部科学省の障害者生涯学習支援政策は、学校から社会への移行期を一つの柱とした画期的なものであるが、これは、全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会による「福祉事業型専攻科」実践を背景にしている。視察研修では、障害者生涯学習支援政策の全体像を理解する上でも、地域にはない全国の優れた実践から学ぶことを大切にしてきた。今年度の視察研修においても、昨年度と同様、視察研修は、参加者の視野を広め、障害者生涯学習支援のあり方について大きな影響を与えた。

④「コンファレンス」

第 1 部の成果報告では、各事業の実施責任者は、実践報告とまとめをパワーポイントを使い、また、参加当事者の発言も取り入れて発表した。それぞれ生き生きとわかりやすく適切にまとめられ

た報告であった。

第 2 部のラウンドテーブルでは、文部科学省障害者学習支援推進室室長の鈴木規子さん、中部大学現代教育学部教授の伊藤佐奈美さん、春日井市文化スポーツ部長の上田敦さん、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授の辻浩さんの 4 人の方に登場していただき、それぞれの立場から、テーマ「地域共生社会と障害者生涯学習支援を考える」にアプローチしていただいた。

最後に、コーディネーターの田中は、文部科学省の実践研究委託事業終了後も、春日井市が「民間と行政との連携・協働」の仕組みを作り、学校卒業後の障害者の文化・芸術、スポーツ教養など生涯にわたる学び支援に取り組んでいくことが重要であるとまとめた。

Ⅱ．委託事業3年目（2023 年度）の課題

文部科学省委託事業 1 年目(2021 年度)と 2 年目（2022 年度）の 2 年間に築き上げてきた取り組みをさらに充実・発展させ、委託事業終了後も引き続き、春日井市において、障害者の生涯学習支援の取り組みを継続・定着させていくために、2023 年度委託事業に応募する必要がある。

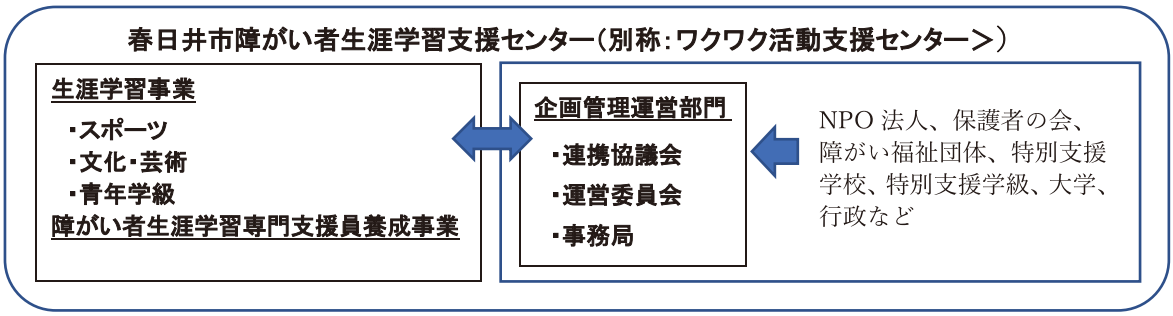
2023 年度の委託事業 3 年目は、これまで取り組んできた 4 つの事業をそれぞれ継続・充実させること。また、委託事業終了後（2024 年度以降）にこの事業を春日井市でどのように継続・定着させていくかについて、市当局者と、時期を逸せず早急に、新たな事業を政策化し予算化していくための協議を始めなければならない。

前者については、新たに、障害者生涯学習支援の核となるべき、当事者集団が学習主体となる「障害者青年学級」（仮称）の立ち上げについて保護者をはじめ関係者と協議し、その実現に向けて取り組みたい。

後者について、文部科学省の委託事業終了後、春日井市における事業化をどのように図るか。基本的に、現在の委託事業に取り組んでいる考え方や仕組みを踏襲することが求められる。要は、民間と市行政との連携・協働を、継続・発展させることである。以下は、田中の私案である。

「春日井市障がい者生涯学習支援センター（別称：ワクワク活動支援センター＞)」（仮称）を設置する。それは、必ずしも、独立した建物や独立した部署でなくてよい。特に、このセンターの企画管理運営部門では、事務局長は行政からではなく、民間から選出され、パート的な勤務体制が可能なこと、また行政からは、複数の職員（兼任）が配置されること、そして、市行政と民間とを繋ぐコーディネーターの配置が望ましい。市の人的・財政的な大きな負担なしに、「障がい者生涯学習支援センター」を設置し、長期にわたり安定した企画管理運営体制の構築による柔軟な取り組みを創造していくことが求められている。

図　春日井市における行政と民間との連携・協働による障がい者生涯学習支援体制の構築（私案）



（文責：田中良三）

（編集後記）

この報告書とは別途に、『第２回 障害者の生涯学習実践研究講座（2022） プログラム集』を冊子として発行し（2022 年 7 月 28 日）、各講座内容と資料として文科省・有識者会議「報告書」を添付し、全 80 頁に編集しました。また、同様に、コンファレンスでは各成果報告とラウンドテーブルの発表内容を編集し、全 54 頁の冊子として発行（2022 年 12 月 17 日）しました。

もし可能であれば、本報告書とこれらの冊子を合わせて、私たちの事業の全体を捉えていただき、忌憚のないご意見をいただけるならこれに勝る喜びはありません。

誠に勝手を申しますが、文部科学省の委託事業に取り組み、この報告書をまとめた私たちの偽らざる気持ちです。

（田中良三）

令和４年度 文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」委託事業

『春日井市における民間団体との連携協働による障害者生涯学習プログラムの開発』
（報告書）

発行日　令和５年２月 25 日
発行者　NPO 法人春日井子どもサポート KIDS COLOR
連絡先　〒480-0304　愛知県春日井市神屋町 1759-1
TEL:0568-88-6873　（携帯）090-4163-4365　志村あて
E-Mail:kidscolor2015@gmail.com 又は kpqnq908@yahoo.co.jp